

人間は百面体。

ひとつの面だけでも、つながれたら

NPOや地域活動を応援するCS神戸の事務局長。100か所近くの居場所の開設・運営支援に携わる。

認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸(CS神戸) 事務局長 飛田 敦子

地域の「居場所」づくりで大事にしているのは、交流だけでなく「自分らしくいられて役割がある」場であること。人が元気でいられるために必要なことだと思っています。三木の金物職人だった方が娘さんと住むために神戸に来られたけど、知り合いは一人もいない。「包丁研ぎ」の日を作ることで、ご本人の生きがいに。ずっと専業主婦をされてきた方が、子ども食堂で大活躍。大企業の重役で厳格だった方が、ボランティア活動を通して和やかに。そんな例がたくさんあります。参加者が

ご縁をつなぐ、にぎわいづくり

自分らしく生きられる社会の創出



子育てをしながら女性管理職として活躍。仕事と家庭を両立しやすい社内環境づくりに尽力。

日本イーライリリー株式会社 部長 岡本 麻紀子

リモートワーク、子育てをしながらの管理職など、多様な働き方について当事者として取り組んできました。私の場合、「家庭の顔」と「仕事の顔」の両方があってこそ自分。そのために、全部自分でしようとすることは早々に諦めて人に任せながら、「ここだけは自分でやりきる」ということを決めてやってきたように思います。制度やカルチャーは作っていくもの。当事者がその立場にいるからこそ言えることを伝え、周りを巻き込んでいくことで変わっていくと思っています。



諦めるところと、諦めないところのメリハリ

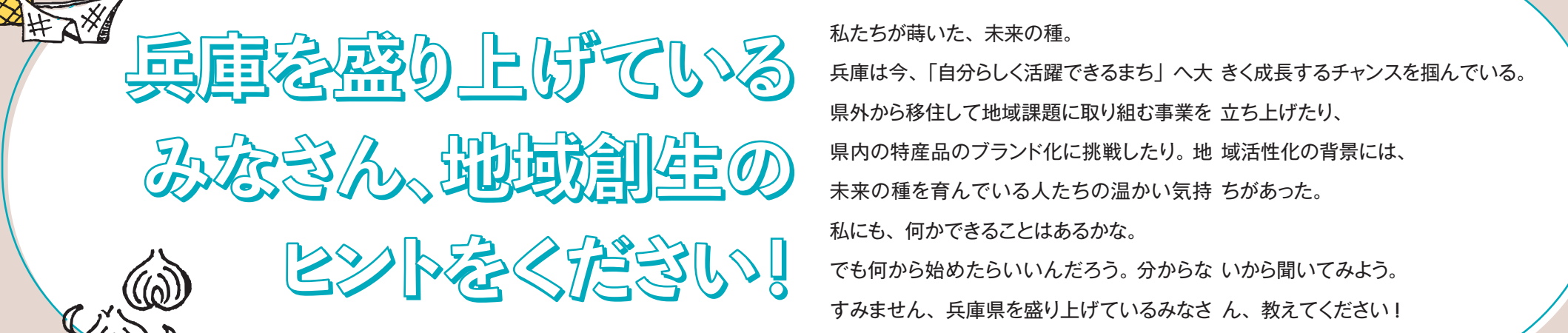


2つ3つの家族が助け合う、それも十分にコミュニティ

神戸の下町で暮らす2児の母。下町暮らしの魅力を伝える様々なコミュニティ活動を実践

合同会社ごともみらい探求社 下町暮らし研究所代表 小笠原 舞

長田はおせっかいな地域と言われますが、実は誰もおせっかいとは思っていません。例えば、銭湯で隣のおばちゃんや子どもを見られるのは、自然な興味関心なんです。それをありがとと普通に受け取れば、「人を頼る」というハードルはそんなに高くはありません。自然体で助け合える身近なコミュニティがあると自分が楽で、自分らしく子育てや仕事ができる気がするんです。暮らしに正解はないし、興味もそれぞれ。煙や朝活などいろんな入り口から、人が混ざり合って起こる化学反応を楽しんでいます。



兵庫を盛り上げているみなさん、地域創生のヒントをください！

私たちが蒔いた、未来の種。

兵庫は今、「自分らしく活躍できるまち」へ大きく成長するチャンスを掴んでいる。県外から移住して地域課題に取り組む事業を立ち上げたり、県内の特産品のブランド化に挑戦したり。地域活性化の背景には、未来の種を育てている人たちの温かい気持があった。

私にも、何かできることはあるかな。

でも何から始めたらいいんだろう。分からないから聞いてみよう。

すみません、兵庫県を盛り上げているみなさん、教えてください！



自分のワクワクを俯瞰する

淡路島に移住し、シマトワークスを起業。島の豊かな資源を生かした事業を、次々と生み出す。

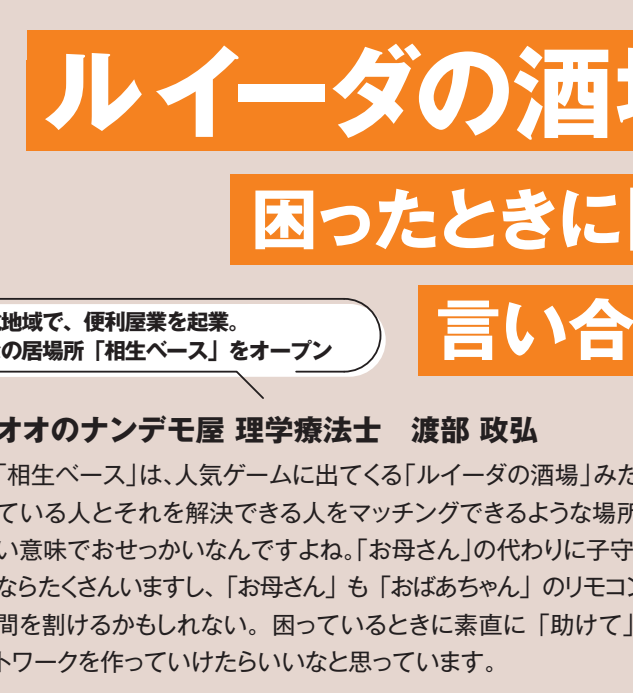
株式会社シマトワークス 代表取締役 富田 祐介

東京を離れ、淡路島で起業したのは、島の人・モノ・コトが好きだから。そうした自分の「好き」を企画に生かすのが「ワクワク」するんです。今の自分はちゃんと「ワクワク」できているか？ なんとなくの「おしごと」になっていないか？ いつも自分のワクワクを俯瞰しています。感動した映画にうらやましさを感じたり、分野の違う場で活躍する人を見てライバル心を感じるのはなぜだろう？ なんて考えることも。ここまでくると、もはや「習性」なんですかね。「食の学校プロジェクト」も、そうしてできたひとつ。ワーケーションに来た人たちがみな胃袋をつかまれるほど、魅力的な食材が集まる淡路島に、食のプレーヤーたちが学び、つながれる場所を作りたいんです。たいそうな「ビジョン」より「ワクワク」。ワクワクする自分に忠実になれば、ご近所さんから「島のためにがんばっている人」と言われるようになりました(笑)。

郷土愛とプライドを「Local to Local」で

代表取締役社長 河野 圭一

「ひょうご五国ワールド」に県外の人と一緒に来られる県在住のお客さんって、みんな自分の地域の「おいしい」とか「タマキ」は淡路のしか食われへんとか(笑)。五国にはそれぞれ地域のプライドがある。でも、五国がつながり合うことで、その文化や食の魅力はもっと伝わるはず。それが東京で売れなくてもいいんです。国内でも海外でも、本場に「Local to Local」が新たな文化や商品を生むかもしれない。



ルイーダの酒場 みたく。困ったときに「助けて」と言い合えるまちに

高齢化地域で、便利屋業を起業。みんなの居場所「相生ベース」をオープン

オオのナンデモ屋 理学療法士 渡部 政弘

「相生ベース」は、人気ゲームに出てくる「ルイーダの酒場」みたいにしたいんです。困っている人とそれを解決できる人をマッチングできるような場所に。この町の人って、いい意味でおせっかいなんですよね。「お母さん」の代わりに子守りしてくれる「おばちゃん」ならたくさんいますし、「お母さん」も「おばあちゃん」のリモコンの電池交換くらいなら時間を割けるかもしれない。困っているときに素直に「助けて」と言える町。そんなネットワークを作っていきたいなと思っています。



みんなで見守り、育てるまち

暮らしの持続性の確保



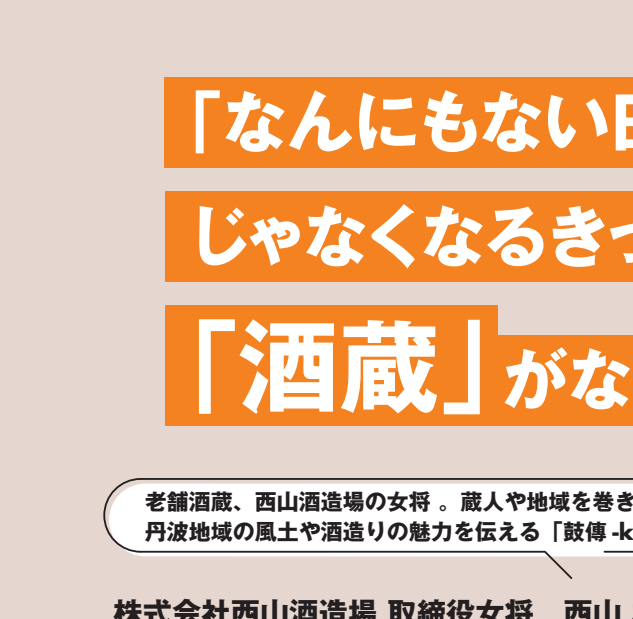
何が生まれる

人付き合いの中で、ことが地域貢献。

兵庫各地の食材を一堂に味わえる「ひょうご五国ワールド」を運営。郷土の食文化の魅力を発信し、地域活性化に貢献。

地域の資源を、見逃すな！

五国に拡がる可能性の追求



「なんにもない田舎やん」じゃなくなるきっかけに「酒蔵」がなれたら

老舗酒蔵、西山酒造場の女将。蔵人や地域を巻き込みながら挑戦を続ける。丹波地域の風土や酒造りの魅力を伝える「鼓傳-koden-」をオープン。

株式会社西山酒造場 取締役女将 西山 桃子

地域にとって酒造りだけじゃない「酒蔵」の役割って何だろう？ そう考えるようになった転機は、2014年8月の豪雨による土砂災害でした。蔵も商品も土砂でダメになって「潰れるかも…」という状況で、ふとこの地域から伝統産業の火を消してはいけないと思ったんですよね。美味しい地酒がある、通学路に酒蔵がある。それだけでも地元を誇れるきっかけになるかもしれないって。昨年、古い酒蔵を改装して酒・発酵・芸術の複合施設「鼓傳(こでん)」をオープンした際は、

まず地域の方をお招きしました。中には「子どもの頃、この蔵で遊んでたわ」と喜んで下さる方も。今の子どもたちにとっても、思い出に残る場所になったら嬉しいですね。「鼓傳」は間口を広げて、酒造りや丹波を知ってもらう場を目指してます。丹波の木材でメニューブックやトレーを作ったり、地元農家さんの有機野菜を使ったり。食事や買い物しながら丹波の魅力に触れて貢献できる、そんな循環を生み出していきたいです。

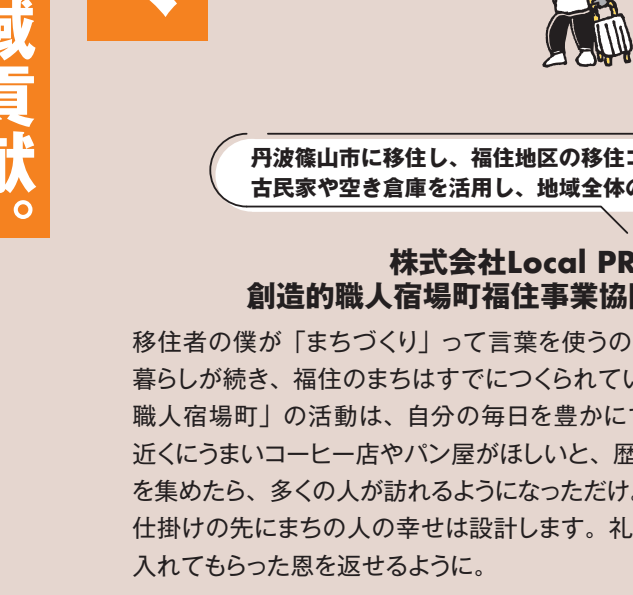


飲み歩く

豊岡でゲストハウス起業。コンセプトは、旅行者と地域を繋ぐ交流の場

Hostel Act&もりめ食堂 森 恵美

私が思う豊岡の一番の魅力は、やっぱり“人”かな。北前船の寄港地だった歴史があるからか、移住者にも旅行者にも壁がなくてフランクなんです。私自身、あちこち飲み歩くうちに地域の人との関係性ができて、今ではゲストハウスのお客さんも巻き込んでの交流。行きつけのスナックに外国人を案内してくれるおじいちゃんもいたり(笑)。市場や劇場や銭湯…豊岡の好きな場所にはずっとあり続けてほしいから、より多くの人が訪れるきっかけが大切なんです。



創造的職人宿場町

丹波篠山市に移住し、福住地区の移住コーディネートに取り組む。古民家や空き倉庫を活用し、地域全体の価値向上に貢献。

株式会社Local PR Plan 代表取締役 創造的職人宿場町福住事業協同組合 安達 鷹矢

移住者の僕が「まちづくり」って言葉を使うのは上から目線。脈々と暮らしが続き、福住のまちはすでにつくられていたのだから。「創造的職人宿場町」の活動は、自分の毎日を豊かにすることでしかなくて。近くにうまいコーヒー店やパン屋がほしいと、歴史的なまち並みに職人を集めたら、多くの人が訪れるようになっただけ。ただ利己的ではなく、仕掛けの先にまちの人の幸せは設計します。礼儀知らずの小僧を受け入れてもらった恩を返せるように。